

在胎期間別出生時体重曲線の算出法の比較
— 子どもの健康と環境に関する全国調査 —

【背景】在胎期間別出生時体格基準値は、新生児のリスク予知や早産児の出生後の成長の指標として用いられている。現在、日本においては、経膈分娩で出生した児を対象に作成された標準値が利用されており、増加傾向にある帝王切開で出生した児は考慮されていない。また、標準値の作成にあたっては、LMS法が一般的に用いられているが、データに依存するという問題点がある。

【目的】在胎週数別出生時体重曲線を、従来のLMS法と分位点回帰法に基づいてそれぞれ作成し、結果の差異を比較する。

【対象】環境省が実施している「子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）」の出産時全固定データを用い、在胎期間別出生時体重曲線を算出するのに必要なデータに関して欠測がない児を解析対象とした。

【方法】正規分布に従わないデータに対してBox-Cox変換を用いてデータを正規化し各パーセンタイル曲線を求めるLMS法、データの各分位点に対して曲線を当てはめる方法を適応した。

【結果】抄読会において示す。